診療のご案内

| 外来診療は従来通り行っております。また、通院困難な方には訪問診療も行いますので、ご相談ください。
| 入院施設は一部再開しましたが、復旧工事中のため従来のサービスが提供できません。ご了承ください。
| 救急の入院をご希望の場合は、ご連絡ください。
| 病院敷地内は足元の悪いところがございますので、じゅうぶんご注意ください。
| 電話がかかりにくくなり、たいへんご迷惑をおかけしております。

Reborn 表紙タイトル：Reborn（リボーン） 新しく生まれ変わること。再生。

MASHIKI HOSPITAL
社会医療法人ましき会
益城病院

社会医療法人ましき会 益城病院
〒861-2233 熊本県上益城郡益城町惣領1530
TEL.096-286-3611
外来お電話受付時間（月曜～金曜）
午前： 9:00～12:00　午後：13:30～17:00
益城病院 検索

Reborn

MASHIKI HOSPITAL
社会医療法人ましき会
益城病院

熊本地震から、2ヵ月余りが経とうとしています。
過酷極まりない状況の中、懸命に頑張ってくれた職員の皆さん、
その献身的な仕事ぶりを誇らしく、大変ありがたく思っています。
しかし、ここで今、ストイックに人を支援する以上に大切なことは、
一人ひとりが自分をいたわりながら、楽しみを見いだしていくことです。
ゆっくり休養をとり、私たちらしい心のありようを取り戻したいものです。
「益城病院には、おおらかで心安らぐ独特の雰囲気がある」
「いつも時間がゆっくり流れていて、ほっと心が癒される」
当院を訪れた方々から、幾度となく聞かせていただいた言葉です。
木々が風にそよぎ、季節の花が咲き、おだやかな人の笑顔がある。
大切なこの空気感を、ともに守り抜いていけたらと思います。

地震発生から今日まで、ご支援くださった全ての方に対し、
言葉では表せないほどの感謝の思いでいっぱいです。
ありがとうございました。

益城病院 理事長
犬飼邦明（いぬかい くにあき）

希望を捨てずに、新たな道のりを

益城病院 院長
松永哲夫（まつながてつお）

４月14日の夜9時25分頃、私はまだ院長室にいました。帰ろうとした時、ドカーンと、今まで経験したこともない衝撃。とっさに、爆撃か何かだろうか？それから、激しい揺れに地震だと気づきました。各病棟を回り、当直医や看護師、患者さん全員の無事を確認し、粉塵がまい、ガスの臭いが漂う厨房でガス栓を止め…そうこうするうちに30人ほどの職員が集まって来ました。橘病棟の１階に本部ができ、患者さんを避難誘導しました。普段から備えていた避難バッグも大いに役立ちました。

マグニチュード6.4の激震は益城町一帯に甚大な被害を与え、道路は寸断、ライフラインも途絶。翌15日は明け方５時頃から職員が集まり、「患者さん199名を、とにかく早く安全な場所に避難させなくては」と気をもむ中、有り難いことに県内の病院・施設から受け入れの申し出をいただきました。ようやく149名の移送と50名の退院を完了させたのは、夜8時過ぎ。しかし、安堵したのもつかの間、今度は16日未明にマグニチュード7.3の本震が発生。益城病院は、さらに大きな打撃を受けたのです。強い余震が続く中、施設の入所者計150名と一般の避難者150名を抱え、機能を大幅に失った病院の中は、まさに混沌とした状態でした。職員の６～7割が避難所に身を寄せ、家が倒壊したり介護者を抱えている者も少なくありませんでしたが、周囲の温かいサポートにも助けられ、一日一日を乗り越えてきました。

地震発生から約２ヵ月。これからは、被災者でありながら患者さんや避難者の方を支援してきた職員のメンタルケアを重視したいところです。まず、積極的に休暇をとるとともに、無理をせず、自分を追い込まず、現実をゆるやかに受け入れることが大切だと思います。ともに泣き、笑える情緒的な絆を大切にして、視点を変え、「できたしこ、なったごつ」と、ぼちぼち復興に取り組んでいきましょう。その先に、益城病院の新たな道が開けることと信じています。

①救援物資を届けて下さった皆さんと村添看護師（右）②緊急避難バッグ③ドローン撮影による病院全景④倒壊したバラ園の噴水

熊本地震を経験して

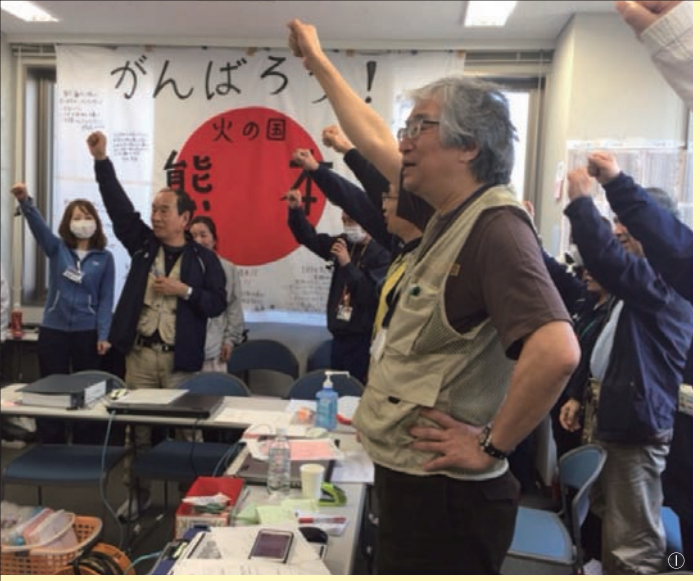
寄稿
益城病院 看護師
村添清美（むらぞえきよみ）

4月14日の消灯前、準夜勤だった私は、突然の地震に驚きつつ、患者の避難誘導を行った。余震が続く中、二次災害を防ごうと病棟内を走り、居室から廊下に出るよう呼びかけた。物が倒れ散乱し、これまで幾度となく行った避難訓練は役に立たない。電話は取れず、他病棟の状況確認もできない中、院長が安否確認を買って出られ、2・3病棟の患者は1病棟へ、橘病棟は2階へと避難することになった。日頃、頑なに車椅子を利用する患者が「歩く、歩ける」と話し、介助の必要な患者には、男性スタッフが「俺が抱えますよ」と、みんな積極的に協力し移動した。

その後、理事長より、「23時に本部を立ち上げる。看護部のリーダーはあなたで」との指示。経験のないことに戸惑い不安であったが、傍で院長が「あれ以上強い揺れは来ないから」「うちの奥さんはテレビを見てるらしい」とつぶやく声に安堵を取り戻すことができた。

本部立ち上げ間もなく、「患者さんは、全て退院か転院させる。患者さんの薬と転出データを準備して下さい」と理事長から方針が示され、今後の展開が見えた。「患者さんが不安になるから灯りを絶やさないで」「ヘルメットはかぶってる？」と次々に聞こえる言葉に励まされる。一番驚いたのは、施設スタッフの言葉。「大丈夫です、発電します。燃料は補給します」と即答された。困難な状況下で、理事長の提案に“NO”はなかった。患者は、病棟の廊下やフロアに雑魚寝状態だが、大きな外傷もなく過ごすことができた。翌朝、明るくなった外を見ると、いつもあるはずの通路は離れ、隆起して崖になり、考えられない形になっていた。その中を次々と出勤してくるスタッフを見て、皆の無事とチームワークをありがたく思った。

その後、次々と届く救援物資の担当をしながら、このままコンビニの店員にでもなるかと不安だったが、「患者受け入れの準備を」という理事長の言葉に、看護師に戻っていいんだと胸をなでおろした。私は、地震直後から次々と的確な指示を出される理事長に敬意を抱く。強いリーダーのもと、行動できることを誇りに思う。今後、この体験をもとに、看護師として前向きに進んでいきたい。



①毎朝の全体会で「がんばろう熊本！がんばろう益城！」を唱和②ＤＰＡＴ支援(4/15)③災害対策本部会議(4/17)④自衛隊給水活動(4/19)⑤病院片付け隊(4/21)⑥毎日のラジオ体操(4/21)⑦全体会(4/21)⑧ましき塾(4/25)⑨厚労省担当者打ち合わせ(4/25)⑩ＮＨＫ・Ｅテレ「ハートネットＴＶ」取材(4/26)⑪医局診療風景(4/27)⑫病院見回り(5/12)

熊本地震発生から今日まで

第1期（前震・本震の発生）

4月14日（木） 21:26 地震発生（震度7／M6.4）
22:10 橘病棟1Fに災害対策本部設置。
犬飼理事長・松永院長陣頭指揮のもと入院患者避難誘導
22:50 全職員へ緊急連絡一斉メールを発信。
福祉ホーム等入寮者を本部へ避難誘導

4月15日（金） 5:00 ライフライン断絶。
入院患者199名の転院・退院を決定（県内病院・施設から受け入れの申し出多数）
電子カルテシステム使用不可のため、カルテ補助簿により患者の申送り書類作成。
DPAT、DMAT、警察、消防、自衛隊、報道各社集結
20:00 受入先病院より迎えあり、最後の患者4名を送り出す

4月16日（土） 1:25 地震発生（震度7／M7.3）
11:00 災害対策本部を特養花へんろへ移転決定
12:00 自衛隊による給水活動。各公的機関、医療機関、施設等との情報交換
16:00 特養花へんろに本部移設完了

第2期（花へんろ本部）

4月17日（日） 9:00 朝の全体会を開始。
11:00 熊本県医療政策課へ給水支援要請。自衛隊による給水活動。
DPAT、DMAT、支援物資、炊き出し等のボランティア受け入れ（その後も継続）
病院復旧グループ、院内感染対策グループ、受付対応グループ、物資管理グループ、
病院入口保安要員等の担当を職員で分担
県内外病院より自家発電装置の支援が届く。電子カルテシステム仮復旧

4月18日（月） 10:00 特養花へんろ事務所にて臨時外来診療開始（再診のみ）
職員の安否と被災状況確認。テレビ局、新聞社等の取材対応（その後も継続）
関係医療機関や企業、公的機関等より災害見舞いに来院（その後も継続）
病院敷地内に仮設トイレ5基設置。病院復旧グループにて病院内片付け
病院の夜間警備開始（県警協力）

4月20日（水） 訪問看護開始

4月21日（木） 職員向け情報共有専用インターネット掲示板設置。
益城病院復興ロードマップ策定。建物構造診断により使用上問題なしの判定

4月22日（金） 特養花へんろ静養室で子ども心療外来開始。
家屋倒壊職員の避難受入開始（院内施設を避難所として利用）

4月23日（土） 育児室受入開始

4月24日（日） 病院夜警体制強化（（株）東西警備保障）
朝・夕の全体会で「がんばろう熊本！がんばろう益城！」の唱和開始

4月25日（月） 13:00 厚生労働省より来所。DPAT、大学病院チームの支援等について意見交換。
橘病棟内に職員の子ども（小・中学生）を預かる臨時ましき塾開講

4月27日（水） 近隣住民へ、災害状況について聞き取り及び挨拶廻り。病院内電気仮復旧。
給食提供支援の打合せ（長崎県の（株）ほっとキッチン協力）

4月28日（木） 外来診療体制整備。院内ネットワーク通信環境の確認。
明日、災害対策本部を益城病院へ移転決定

第3期（益城病院診療再開）

4月29日（金） 災害対策本部を益城病院1病棟へ移転。
本部、外来、総合受付など機能整備、準備（～5月1日）

5月 2日（月） デイケア再開。
（株）ほっとキッチンから給食支援開始。栄養管理科より職員向けお弁当販売開始。
臨時医局会、臨時経営管理部会開実施。
県外の精神科病院から医療支援チーム来院（長期支援へ）
職員のメンタルヘルスチェック開始

5月 9日（月） 外来診療再開（新患・再来）

5月10日（火） 橘病棟入院患者受入再開。
病院復旧のための建設打合せ～ 破損・故障箇所確認と修復作業開始
ドローンによる病院全景を空撮。
益城病院および関連施設罹災証明申請手続き

第4期（今後の展望）

6月内に病棟本館復旧を目指し、入院患者受入再開（認知症治療病棟、精神療養病棟）
職員の休養確保体制とメンタルヘルスチェックの継続
訪問診療、訪問看護、被災者支援等のアウトリーチ強化

院庭にたわわに実ったアンズ

Thank you for your full support.

益城病院の年輪

寄稿
あさかホスピタルグループ診療支援アドバイザー
渡邉忠義（わたなべただよし）**さん**

阿蘇地域でのDPAT活動を終了した憲法記念日の昼前、翌週から始まる益城病院支援の事前挨拶に伺ったはずが、犬飼理事長と松永院長に温かく迎えられた。一方で、被災状況の凄まじさを目に耳にするたび、言葉を失っていた自分を思い出す。無念、不安、困惑が入り混じった極限の状況下においても来客への笑顔や配慮を欠かさないお二人の顔を思い起こすと、今でも目頭が熱くなる。

あさかホスピタルグループは、東日本大震災の際に九州をはじめ日本中からいただいた優しさに、少しでもお返しができればとの想いから、8週間の益城病院支援を行うことに決め、多くの職員の賛同と協力を得て、まもなく4週目の支援が終わろうとしている。

派遣メンバーの多くは、熊本に向かう日が近づくと「何ができるのか、何を行えばいいのか」と、支援の大義名分を重く受け止めていたが、日々、益城病院の皆さんと交わす挨拶、交わす笑顔の中で私たちが救われていたことに気付いた。生きることそのものに大きな打撃を受けた職員、避難所から出勤し、言葉にできない焦燥感を背負っている職員、それを支えようとしている職員などさまざまな人に出会った。

支援らしい支援ができないまま終盤を迎えた金曜日の朝、理事長をはじめとした幹部職員の英断を伺った時、益城病院に一筋の輝きを見た。目標達成までの道程は険しいかもしれないが、皆、その光を目指しているように感じた。その場に同席できたことで、あらためて支援の意義を噛みしめた瞬間であったように思う。

益城病院のホームページに開設65周年を記念した犬飼理事長の言葉を見つけた。「樹木の年輪は、成長も停滞も含め環境変化を表現するといわれています。益城病院の年輪が今後どうなっていくのか、楽しみでもあります。」今、色濃い、意味のある年輪を創っていると思う。

“がんばっぺ！くまもと。やってみっぺ！ましき”

バラ園を彩る満開のつるバラ

Thank you for your full support.

益城病院のスタッフの皆様へ

寄稿

岡山県精神科医療センター院長

来住由樹（きしよしき）さん

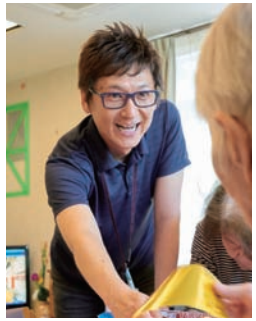
前震が4月14日、本震が16日、けれども岡山県精神科医会のチームが益城病院に伺うことができたのは5月1日になってしまい、申し訳ありませんでした。

岡山県DPATは、DPAT先遣隊の一員として、4月15日朝8時に陸路で熊本に向け出発し、夕刻には熊本赤十字病院DPAT調整本部に到着しました。そして、被災地を見ないままコーディネート業務につき、役割に徹しました。初期の転院ミッション（561名）のあとは、避難所巡回の調整業務。各チームが毎日数件の面接を行うものの、現地の人たちに必要なことができている実感が持てませんでした。4月下旬となり、ニーズが減じて撤退も考える必要があるとの現地チームからの報告に、岡山本部は「ニーズに出会えていないのでは？」と考えました。そこで私、来住が現地調査と調整のため30日に熊本に向かい、益城町と益城病院の様子を目の当たりにすることとなりました。ようやくDPAT活動と現地のニーズとのミスマッチに気付いたのです。「DPATは何ができるのか」でなく、「現地は何を必要としているのか」の視点が不足していました。

ただちにDPATと連携しつつも、自律的に活動できないDPATとは別組織として、『益城病院支援チーム岡山』の活動の開始が必要と考えました。岡山県に帰り、岡山県精神科医会拡大理事会に諮ると、『益城病院支援チーム岡山』を岡山県の精神科医療機関全体で支えるとの決議が全会一致でなされました。そして、これまで一緒に時間を過ごさせていただいています。

『益城病院支援チーム岡山』の活動マニュアルには、“心得”が記されています。私たちが大切にしていることであり、抜粋して紹介致します。「求められているニーズに応えることが基本で、支援の押し付けは迷惑であると心得る」、「被災地の職員、要支援者の負担を軽減しつつ成果を上げることが必要であり、被災地の負担になる依頼をせず、自分たちの活動に必要な事は自ら解決するよう努める」。私たちが行ったことは僅かですが、少なくとも、心はともにありたいと考えてきました。

益城病院の職員たちは、前震後の停電の中、患者さんを転院と退院で守り抜かれました。サバイバルキットは、職員だけでなく全患者に配られ、断水の中、生き抜かれました。自宅が被災して避難所に身を寄せながら子どもも連れて勤務し、地域の医療を守り抜かれました。その平常心を維持し続ける力とチームワークに感動し、元気をいただきました。益城病院が体験され克服しつつある事は、きっと次の被災地の力になります。岡山チームは、DPATの制度改革を行うため、益城病院での体験から意見を述べたいと思います。最後になりましたが私たちに多くのお気遣いをいただいたことに心から感謝致します。



地域とともに歩もうとする
益城病院の姿に
大きな勇気をもらいました。

あさかホスピタルグループ 職員
吉川直人さん（社会福祉法人安積福祉会 生活指導相談員）

私たちも、5年前に大規模災害に遭いました。家を失い、家族とも連絡が取れない中、患者さんや入所者の支援にあたった人もたくさんいました。益城病院のスタッフの多くが今も避難所から通い、被災者でありながら自分のことは後回しで頑張っておられるのを見ると、そのプロ意識に敬服せずにはおれません。また、益城病院は益城町の住宅街にあり、スタッフの皆さんからは強い地元愛が伝わってきます。困っている近所の人に自分の発電機を貸したり支援物資を届けたり、笑顔で道行く人をねぎらい、家の後片付けを手伝う姿に、サポートするはずの自分が勇気をもらいました。

復興への道のりは長く険しいと思いますが、「あの地震があったから大切なことに気づき、レベルアップできた」と思える日が必ず来ます。5年前、熊本からも多くの支援があり、その恩返しのつもりでやって来た益城町。このご縁を機に、益城町と益城病院が一体となって再生するための支援を今後も続けていきたいです。

気を張り詰めた状態で2ヵ月余りが過ぎた今、益城病院の皆さんには、ゆっくり心と体を休め、それぞれの生活を取り戻すことを最優先してほしいと思います。それが、結果的に地域や病院の再建を早め、よりよいケアにつながるものと信じています。

Thank you for your full support.

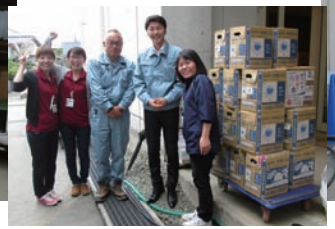
益城町の人たちの
底力を信じています。

岡山県精神科医療センター 作業療法士
池上淳哉さん

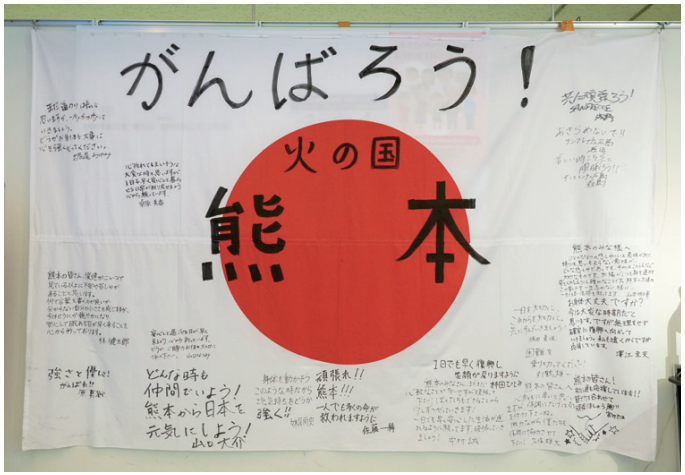
尼崎市に住んでいた中学生の時、私は、阪神淡路大震災を体験しました。死を間近に感じた恐怖はずっと心に残り、地鳴りに似たトラックの振動や窓ガラスの揺れる音にも敏感になりました。そんな経験から、自分に何か特別なことができるわけではないけれど、益城の人たちに寄り添えたらという思いで支援チームに参加し、5月15日に熊本の地を踏みました。

市内を抜け、益城町に入った時に見た光景は衝撃的でした。それでも、益城病院に来てみると、チームワークのとれたスタッフの姿があり、いい人たちがそろっているなぁ、と感じました。訪問先で出会った地元の人からは、「地震を経験してから、混み合った道で譲りあうようになった」「人っていいものだと思った」という前向きな声を聞きました。倒壊した自宅にくまモンのぬいぐるみを置き、“がまだすばい！”とメッセージを発信している人もいて、益城の人たちの強さと温かさが身にしみた1週間でした。

益城病院の構内を歩くと、こんな時でもバラが咲き誇っています。認知症の患者さんが黄色い小さな花に足を止めているのどかな姿があります。長い闘いになるとは思いますが、きっとこの町は、そして益城病院は大丈夫！そう確信し、復興に向かう皆さんの姿を、これからも見守りたいと思っています。



ありがとうございます。



院内敷地は地割、建物には損壊、多くの避難者を抱え、まるで戦場と化した現場。
何から始めよう？？
遠くは東北、そして全国から駆けつけたボランティアの方々、
県外の精神科病院の支援チームの方々、
九州圏内の様々な大学病院の医局など、
力強い「灯」をともしてくれたサポーターの方々、
多くの励ましに感動をもらい、喜びあり、涙あり、
私たちも一歩ずつ踏み出すことができました。

①DPAT支援チーム宮城
②岡山県精神科医療センター来住院長と
③ボランティア清掃
④熊本ホテルキャッスルの斉藤社長自ら炊き出し
⑤日本赤十字支援チーム
⑥炊き出しボランティア（焼きそば）
⑦支援物資の車両に励ましのメッセージ
⑧（株）源より炊き出しボランティア

今、ここから
ともにつながる明日へ

益城病院 臨床心理士
小松哉子（こまつちかこ）

14日夜、県道を下り益城町に入ると、町からは明かりが消え、病院入口の坂はでこぼこで大きな亀裂がありました。身震いが生じ、事の重大さを感じた瞬間でした。しかしそれは前触れであり、更なる甚大な震災に襲われるなど予想もしていませんでした。

突如、このような恐怖を体験し、終わらない余震に立ち往生しながら、みんなが気を張り、くじけないようにと前に前に歩んできた2ヵ月余り。自分や周りのこれまでの歩みを今ここで、「私達、よくやってきた」とほめ、ねぎらってほしいと思います。

まだまだ不安は呼び覚まされ、体だけでなく、心にも力が入ったままの人が多いことでしょう。自分の体や気持ちのありよう、感情や感覚に目を向けることは、この時期とても大切です。ふと現実感が戻って我に返り、疲れが押し寄せ、涙が流れることがあります。徐々に生活は整ってきても、心がついてこないと感じる人もいると思います。話が通じる人と寄り添い言葉を交わし、共に涙し、時には身体を動かし、思いきり笑うことで、少し力が抜け、気持ちが切りかわるものだと思います。

今はペースを落としてよい時期です。程度の差はあっても、頑張った当然の結果として重い疲れがやってきます。また被災状況や家族の事情などが影響し、復興のスピードにも目に見える形で差が生じてきます。もどかしさや焦り、気分の落ち込みを感じる人もいるかもしれません。そんな時、「今は、これまでの2〜3割で大丈夫！半分できたら上出来！」とハードルを下げ、「まず目の前のことを一つ」のペースで、一旦、エネルギーを補給しましょう。季節が巡り、秋、冬を迎える頃に一息つく心持ちでいく方が良いように思います。

地震がもたらしたものは、決してマイナスだけではありません。滞っていた関係がつながり、懸命にいたわりあい、支えあおうと努める人の温かさに触れました。支援者の方々との出会いは、過酷な状況ゆえに、感謝と共に心に刻まれました。そして、震災は乗り越えるものではなく、この体験をゆっくり受け入れながら、共に歩み続けるものだと知りました。長い道のりになります。「ありがとう」「よかったね」「恐ろしかったね」「ビックリしたね」「お疲れさま」「ごめんね」「無理しないでね」「嬉しかった」「また明日ね」と日々声をかけ合い、家族、友達、同僚、ご近所さんなど、お互いの存在を確認しながら、これからも一緒に歩んでいきたいと思っています。